

モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査
2017 秋調査ニュースレター



日本の国土は、亜寒帯から亜熱帯にまたがる大小の島々からなり、そこには屈曲に富んだ海岸線と起伏の多い山岳など変化に富んだ地形や各地の気候風土に育まれた多様な動植物相が見られます。

「モニタリングサイト 1000」では、このような日本列島の多様な生態系を、高山帯、森林・草原、里地、湖沼、湿原沿岸・浅海域、小島嶼に分け、あわせて 1000 か所程度のモニタリングサイトを設置しており、2003 年度より調査を実施しています。基礎的な環境情報の収集を長期にわたって継続することで、日本の自然環境の質的・量的な劣化を早期に把握し、得られた成果を保全施策や学術研究に活用することを目的としています。

モニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査は、干潟をはじめとした湿地生態系の健全性を測ることを目的に、干潟や淡水湿地を利用するシギ・チドリ類と絶滅危惧種であるズグロカモメ、クロツラヘラサギ、ヘラサギ、ツクシガモ(以下「シギ・チドリ等」という。)の個体数調査を、全国に約 140 箇所設置しているサイトで春期(4月から5月)、秋期(8月から9月)、冬期(12月から2月)の計3シーズンで実施しております。

本調査では、各シーズン中に基準日を設け全国一斉に調査を実施し、基準日近辺に国内に飛来するシギ・チドリ類等の総個体数を把握することを目的とした「一斉調査結果」と、シーズン中に飛来したシギ・チドリ類等が最も多く飛来した時の個体数を累計し、各調査サイトの環境収容力を把握することを目的とした「最大個体数結果」の2つの結果を報告しております。

「シギ・チドリ類調査ニュースレター」は、結果の速報や関連情報をお知らせするために、2009 年よりシーズンごとに発行しています。バックナンバーは以下よりご覧いただくことが出来ます。

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/index.html>

また、各期の調査報告や年度ごとの総括報告書では、全調査サイト配置図や全調査対象種の内訳、各調査サイトにおける調査結果等をまとめております。

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html>

モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査 ニュースレター



モニタリングサイト1000

2017年 秋期概要

環境省自然環境局生物多様性センター / NPO法人バードリサーチ

2017年秋期の結果概要

モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査の2017年度秋期概要をお知らせします。

秋期の継続サイトは約2万羽と横ばい

2017年度秋期調査は、2017年8月1日から2017年9月30日までの期間実施されました。121ヶ所の調査サイトで調査が実施され、このうち一斉調査(2017年9月17日を基準日とした前後1週間の調査)への参加は112ヶ所でした。一斉調査期間では、シギ・チドリ類49種12,196羽が記録され、クロツラヘラサギ1羽が記録され、秋期の全サイトの最大個体数(調査期間内に記録された各種個体数の最大値)の合計では、シギ・チドリ類 55種31,137羽が記録され、クロツラヘラサギ37羽、ズグロカモメ3羽が記録されました。

2000年からの「全サイトの最大個体数の合計」と「連続して調査が継続されているサイトのみの最大個体数の合計」を、グラフに示しました(図1)。グラフでは、

最大個体数合計

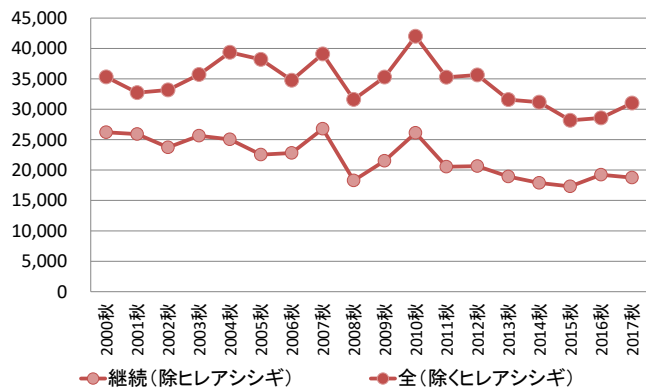


図1. 秋期調査における全サイトと継続調査しているサイトの最大個体数合計の推移 (2000年から2017年の継続サイトN=49)

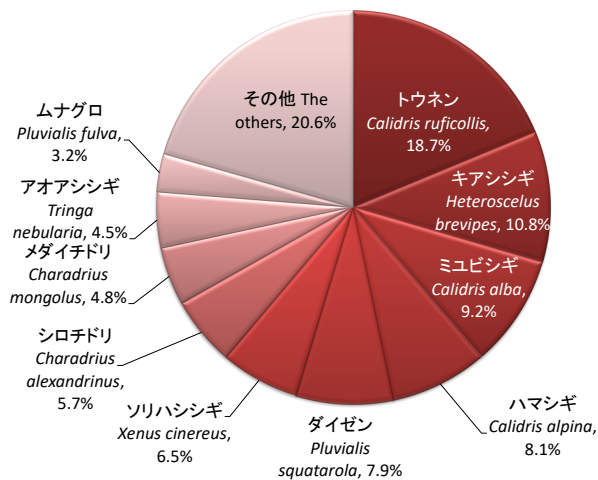


図2. 2017年秋期調査の優占種

海上生活者であるヒレアシシギ類は除外しました。全サイトの最大個体数の合計は、前年度秋期と比べ約2,400羽増加(+8.5%)しましたが、継続サイトでは前年度秋期と比べ全サイト合計とは逆に約900羽減少(-4.5%)しました。サイト別では、北海道東部のコムケ湖(約-1,200羽)、九州の白川河口(約-1,000羽)、大授搦(約-700羽)、氷川(約-600羽)の個体数の減少が目立ちました。逆に、北海道東部の風蓮湖北部(約800羽)、野付崎・尾岱沼(約800羽)は前年度より増加しており、北海道のサイトによっても傾向が異なりました。

最大渡来数が最も多いのは佐賀県大授搦、北海道野付崎・尾岱沼、風蓮湖北部、大分県中津干潟、熊本県白川河口、と北海道、九州地域が上位でした。



写真1. キアシシギ (写真: 守屋年史)

トウネン・キアシシギが上位に戻る

最大個体数における優占種の上位5種は、トウネン(18.7%)、キアシシギ(10.8%)、ミユビシギ(9.2%)、ハマシギ(8.1%)、ダイゼン(7.9%)で、昨年秋と大きく変化しました(図2・3)。トウネン、キアシシギが上位に戻っており、2016年秋の両種が際立って優占順位を落としていました。2007年から2013年までトウネンの最大個体数は大きく変動しながら推移していました(図4)が、ここ数年、その変動幅が小さくなっていました。しかし、今年秋は昨年秋に比べて約3,500羽(+150%)増加しました。またキアシシギも約1,500羽(+80%)増加しました。秋期の増加の要因として、渡り

の時期の気象が悪かった場合に長く中継地に留まるなどの影響があるほか、繁殖地での繁殖状況が良好で、幼鳥の個体数が増えた可能性も考えられます。成鳥と幼鳥の渡来時期に差があるので、各年の渡りの状況から繁殖の状況と個体数の変動に関連があるか分析したいと考えています。

ハマシギの減少は繁殖地の影響？

アラスカで繁殖し、日本に渡来する亜種キタアラスカハマシギについては、2017年繁殖地の雪解けが遅く、繁殖個体が少なかったため、営巣数も少なかったとの報告があります(Alaska Shorebird Group Annual Summary Compilation 2017)。秋期のハマシギの個体数は、2011年から前年秋まで、徐々に増加していましたが、今年秋は前年比で約350羽(-12%)減少していました。これは、秋期の調査期間までに、まだハマシギが国内に渡来していない可能性のほか、繁殖状況の不調の影響が出たことも考えられます。国内へのハマシギの本格的な渡来は10月以降となるため、個体数が安定する冬期の調査データも参考にしながら関連を分析する必要があります。ミユビシギ(-4%)、ダイゼン(+1%)は、全年に比べて変化はあまりありませんでした。

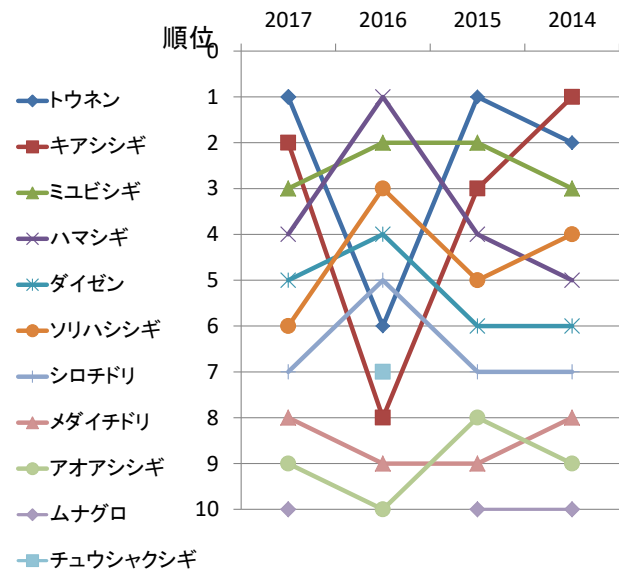


図3. 2014年から2017年の秋期の優先種の順位

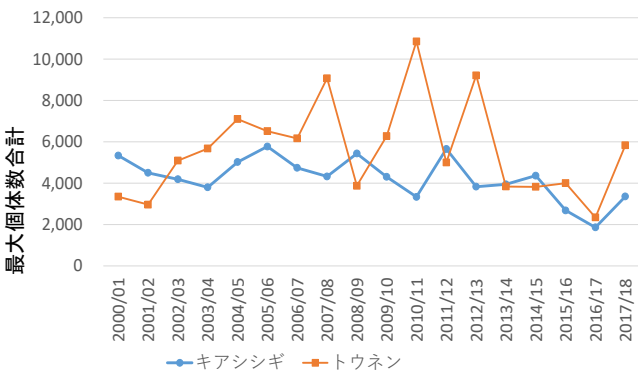


図4. 2017年秋期における優占種上位のトウネン、キアシシギの最大個体数の推移

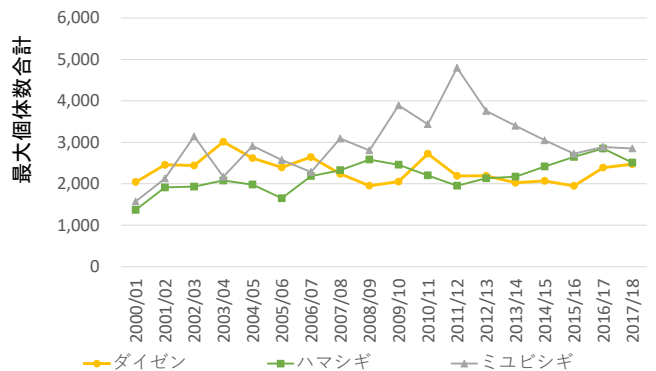


図5. 2017年秋期における優占種上位のミユビシギ、ハマシギ、ダイゼンの最大個体数の推移

モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査 ニュースレター タイトル写真:トウネン(守屋年史) 2017年 秋期概要

発行元: 環境省自然環境局生物多様性センター <http://www.biodic.go.jp/moni1000/>

編集: 特定非営利活動法人 バードリサーチ <http://www.bird-research.jp/>

編集者 守屋年史 電話/Fax:042-401-8661 メール: shigichi@bird-research.jp